

編集者前書き

列島(度欲註:インドネシア)各地でのイスラム諸国の勃興に伴うマジャパヒトの崩壊の物語は、再調査が必要なたくさんの歴史的要素を有している。ジャワの地における最古の王国として、マジャパヒトはヒンドゥー=ジャワ文化の発展の頂点の象徴のみではなく、政権交代とその崩壊後の時代におけるイスラム化のプロセスの中で生じた政治闘争に関する歴史の証拠でもある。

歴史家たちはマジャパヒトの衰亡の裏にあるものを表現するために実に多大なエネルギーを注いできた。しかし残念ながら、マジャパヒトをその栄光の最期にいざなったイスラム化の波の中における華人の役割に関して傾注する歴史家がまだ多くないのである。歴史著述の主流は、より正真正銘でいわゆる「純粋」であると理解されているイスラムの変種、アラブのイスラムからの派生種としての列島のイスラムを解釈しようとする傾向にまだまだ縛られているのである。

Slamet Muljana 教授はこのような考えを持つ一人である。この考えへの固執はマジャパヒトの衰亡にはじめからたくさんあり、この地域へのイスラムの導入と発展の歴史において華人ムスリムの貢献について一つの重要なテーゼがこの持論であった。明確な尽力は簡単ではなくたぶん人口に膾炙しないだろう。〈vi〉我々がどんなに知ろうとも、多くの歴史家たちが既に既成事実としているテーゼは、列島のイスラムはアラビア半島で栄えたイスラムとは異なるプロトタイプであるということを語っているのである。Muljana の発見は、実際に起きたことはそのようなことではなかったと一斉に批判することを否定したのである。上記の過程において多数の要素が取り込まれたゆえに、列島で形成された、特にジャワのイスラムでは、「純粋」のイスラムではなく、多数の変種を有するハイブリットイスラムと区別している。

マジャパヒト以降の歴史における因果関係において、この「アラブ中心主義」というイスラムの支配的な構造の裏にその理由を見つけ出すことは容易ではない。しかし少なくとも、この推測を読み解くための立脚点となりうる二つの点がその基本となる。すなわち、植民地からの別離政策とイスラム純粋主義である。一万人以上が命を失

った1740年の「[バタビアの狂暴](#)」が勃発して以来、華人たちはその後 Pecinan として知られる数か所のゲットーに閉じ込められた。この Pecinan はその前には調和が取れていたジャワ人と華人との関係にひびを入れることになり、歴史の著述を含めいろいろな点で反華人感情を発生させることになった。その頂点は、中国の匂いのするものは最終的にすべて計画的に排除した Orde Baru (度欲註:新秩序)体制が支配的であった時期であった。イスラム純粹主義という二番目の要素も列島における中国の歴史的痕跡を消し去ることに貢献した。この主義は極めて多数でその差がわずかであるような列島のイスラムの経験を貧しくしたといわなければならない。この消滅は偶然でないことはたしかである。その裏には、もてあそばうとする政治的意図と必要性があった。

この本にあって興味を引く他の話題とは、Babad Tanah Jawi、Serat Kanda、スマランの三保洞と Talang 廟のデータのコピーのような公式ではない史料を利用したことである。著者は事実と神話を取捨選択するための完璧な試行を行ってはいるものの、これらの史料の利用は、公式に認められた文学を信用しすぎる支配的な解釈とは異なった観点を持つ歴史の解読となったことは間違いではない。〈vii〉このような方法で歴史の再構築を我々が行う利点はいへん多くまた価値がある。我々は非公式な歴史のバージョンだけではなく、多数の人たちの注目を今まで受けなかった物語、伝説、興味ある事実をも提示するものである。

上記の検討によって、この歴史家であり言語学者の古典的業績を再度出版することを決定した。これ以前にこの本は1968年に出版されたが、内容が物議を醸し出すとして1971年に最高検察庁から出版差し止めになった。経過した三十年以上の年月は理性ある読者たちにとってこの本の内容を損なうものではないように見える。Muljana 教授の遺産相続者の信念に謝意を呈する。前文を書いていた Dr. Asvi Warman にも同様である。この本の旧表記を改めるうえで、現在ではほぼ使われなくなったと思われる語彙を読者にわかりやすくするために少し注釈を加え修正を行ったものである。

お楽しみください。

前書き

Walisongo は中国出身だったのか？

Dr. Asvi Warman Adam 著

1968年に Slamet Muljana 教授は Runtuhnya Kerajaan Hindu-Jawa dan Timbulnya Negara-negara Islam di Nusantara という本を出版した。その当時に議論を醸し出した Wali Songo (度欲註:ジャワにイスラムを広めた九人の伝道師)の一部が中国出身者であるという記事がこの本にはあったため、最高検察庁から発行禁止にされた。この九人のイスラムの伝道師が中国あるいはどこであろうとも世界の一地域の出身であることに間違いはないのである。

問題になったのは、1965年9月30日運動(度欲註:スカルノ政権崩壊のクーデター)を援助したと中国が非難されたゆえに中国は敵として確定されてしまった Orde Baru 体制の時代であったからであった。インドネシア政府は北京との外交関係を断絶し、中国の匂いのするものすべてを禁止したのであった。

この reformasi (度欲註:スハルト後)時代にこの Slamet Muljana の説をより穏やかな心で再研究することが最良になった。Slamet Muljana は Serat Kanda, Babad Tanah Jawi, Poortman が書いて Parlidungan が引用した Sam Poo Kong(度欲註:以下三保洞という)廟の古文書を比較検討した、より正しくはこの三種類の文献を集めて編集したのであった。

Residen(度欲註:地方行政管理官) Poortman は 1928年に Raden Patah は華人であったかどうかを調べるための仕事を植民地政府から請けた。Raden Patah は Serat Kanda では Penembahan Jimbun、Babad Tanah Jawi では Senapati Jimbun と称号していた。Jin bun という語は中国語の位置方言で強者を意味する。ゆえにこの Residen 氏はスマランの三保洞の搜索を行い、牛車に三杯もの古文書、その一部は 400年前の中国語で書かれたものがあった、を持ち帰った。この Poortman のコピーは、物議を醸しだした Tuanku Rao という本の著者である Mangaraja Onggang Parlindungan に引用された、Slamet Muljana はこの本から多数引用している。

Slamet は、1445 年にジャワにやってきた Bong Swi Hoo が Sunan Ampel だと結論付けている。この Bong Swi Hoo はマニラの元中国商館長で 1423 年に Tuban に移動させられた Gan Eng Cu の子である Ni Gede Manla と結婚した。この婚姻から、後日 Senan Bonang として知られるようになった Bonang が生まれた。Bonang は後日 Sunan Giri として知られるようになった Giri と共に Sunan Ampel に育てられた。

Gan Eng Cu の別な息子はスマランの中国商館長になった Gan Si Cang である。1481 年に、Gan Si Cang はスマランの船大工を使って Mesjid Demak の建設を主導した。このモスクの天井を支える柱は、きちんと積層された木材(集成材)で構成される柱の構造を用いて建設されている。この構造の柱は、無垢の木材でできた柱より強風に対して強度があると考えられている。

最期に、若い時に Raden Said という名であった Sunan Kalijaga は Gan Si Cang に他ならないと Slamet は結論付けている。他方、Sunan Gunung あるいは Syarif Didayatullah は Slamet Muljana によれば、Demak を 1521-1546 年の間統治した Sultan Trenggana の息子の Toh A Bo であるとのことである。

Walisongo の一部が中国の出身であったり、華人の子孫であったという説を唱えることに禁止するいわれはない。Slamet Muljana の問題点は、彼が MO Parlingdungan の書いた本の結論に立脚していることである。Slamet でもこのスマランの三保洞廟からの古文書を自分自身で調べなかった。列島(度欲註:国内)にあるもののみならず中国大陸にある中国語で書かれた資料を調査研究することで、この時代(まずは 15~16 世紀にジャワにおけるイスラムの拡散について)よりはっきりと説明ができるはずなのである。

その当時のヨーロッパの艦隊よりずっと大きな艦隊を伴って 15 世紀初頭に世界各地に航海した鄭和というイスラム教徒の提督に関する十分たくさん史料が実際に存在する。鄭和自身にもイスラム教徒の Ma Huan(馬歡)という通訳がいて、この経験を瀛涯勝覧に書いている。

この本の中で、広東、杭州、泉州出身のジャワに住み着いている華人について報

告している。彼らはすでに中国を後にしてジャワ島の東部にある海岸の港町に定住している。その当時 Tuban では「千軒を少し超える」にまで至った住民の大部分を構成していた。

Gresik では、広東人がそこに住み着くまでは「無人の海岸」であった。Surabaya でも大部分の住民は華人であった。馬歛によると「この華人の大部分は既にイスラムに入っており、宗教戒律に従順である」と。(Lombard, Nusa Jawa, 第二巻 1996)

これに続く数世紀に、イスラム教徒の華人の時代に関するヨーロッパの言葉による資料が存在するようになった。17 世紀にバンテンが繁栄を極めた時、同地には大実業家の Tan Tse Ko がいた。彼はイスラムに改宗したと自ら述べて名前も Cakradana と変えてバンテンの社会に溶け込むことができたのであった。

彼こそが世界的な構想をもった貿易商人であった。掲載されている記録では、たとえば、彼は 1670 と 1671, 1672, 1676 年にインドシナに商船を数回送ったという。スカンジナビアの一国の博物館に展示してある、その当時列島で話し言葉でありリンガフランカとなっていたマレー語で書かれた借金の請求書に見られるように Tan Tse Ko がヨーロッパ商人と関係を有していたのであった。

<xii>各自の心に秘め各人が知るのみである信仰について語ろうとしているのではない。その人が信仰に従順であるかどうかは知るべくもなく、この件は史料では述べられていない。当時バンテンの民衆の大部分が信じていたイスラムに彼が正式に入ったかどうかはわからないが、明確なのはイスラム教徒になることで Cakradana はバンテンの民衆の仲間として受け入れられたということである。

官僚として商人も取り上げられる現在でもないのにもかかわらず、王の側近にいたので、Cakradana は 1677 年に港湾長になった。残念なことに 1682 年 4 月に VOC がバンテンを奪い、オランダの専売とするべく、バンテンがこれまで行ってきた国際商取引を禁止した。

この本は、WaliSongo に関するものも含めて列島におけるイスラムの伝播の歴史のみならず一般的に国の歴史を書く人にとって、中国語で書かれた資料も重要である、という記述で終わっている。35 年間この件は無視されてきたのであった。

De. Asvi Warman Adam, 歴史家 LIPI(インドネシア科学院)

序文

〈xiii〉論文 Menuju ke Puncak Kemegahan はサカ歴 1286 年、西暦 1346 年の Gajah Mada 宰相の死去で終わっている。それは Gajah Mada 宰相に護られた Hayam Wuruk 王が権威をふるっていた時代にマジャパヒト王国の国家的繁栄は頂点に達したが故に、ここまでで終わっているのである。マジャパヒト王国にとって、Gajah Mada は太陽のようなものであった。サカ歴 1241 年、西暦 1319 年に彼が登場した時、Gajah Mada は Kuti の乱の束縛からマジャパヒト王国を解放したのであった。Gajah Mada の名は Badander 事件と深い関係を有している。Badander 事件以来、Gajah Mada は政府組織の地位をのぼり続けた。最終的に彼はサカ歴 1258 年に宰相の地位にのぼりつめ、「列島の誓い」と呼ばれるかの有名な政策を宣言した。Gajah Mada はその意見を変えなかったとはいえ、列島の誓いは混乱を引き起こした。栄光の頂点とは列島の理想を実行したことであった。列島の理想の実行はマジャパヒト王国の偉大さをもたらし、平和と繁栄を国民に与えることになった。Gajah Mada はマジャパヒトが危険に脅かされている間の安全担当であり、列島の理想を実現することによってマジャパヒト王国の第一人者になったのである。〈xiv〉サカ歴 1286 年、西暦 1364 年に Gajah Mada 宰相が死去した後、マジャパヒトの歴史は衰亡を始め、その偉大さは色あせ始めた。彼の労苦と Gajah Mada の尽力である神の恩恵によって行われた列島の理想の実現はマジャパヒト王国に与えた輝きをしばませ始めたのであった。Hayam Wuruk 王と Gajah Mada 以降の大臣たちはマジャパヒト王国の偉大さを構築することはできなかった。列島の統一は徐々に崩壊してゆき、王国内での王位継承者間での跡目争いと外部からの蚕食の原因となった。Gajah Mada 宰相がその地位にあった時に育成したマジャパヒト魂は徐々に虫に食われるように腐敗していった。内部からの腐敗と外部からの蚕食はマジャパヒト王国の衰亡に影響したのであった。支配者たちは宗教という名のついた諸戒律を運用できなかった。ぜいたくな生活は Gajah Mada 大臣にの尽力である繁栄の影響であり、Gajah Mada 宰相の死後、マジャパヒトの人たちの魂をして弱体化せしめた。支配者たちの多くは娯楽とぜいたくを追い求め、おそらく国家の魂を作り上げたのであろう。このように、実際にはこの輝かしいマジャパヒトの歴史は Gajah Mada 宰相の人生の歴史であったと言えるのである。

Gajah Mada 宰相の死後のマジャパヒト王国の歴史を調べることは引き続き行う必要がある。この時代は国家の魂が弱体化し繁栄が後退したのであった。マジャパヒト王国はその衰亡に直面したのであった。いずれにせよ、この時代はスポットライトを当てて、輝ける時代と区別する必要がある。このようにこのマジャパヒト王国の後退期の歴史研究の結果は独立した部分となり「ジャワヒンドゥー王国の衰亡」という題を与えることになった。

Hayam Wuruk 治世以降の時代の研究は色々な問題に突き当たるのである。詩人プラパンチャあるいは Kanakamuni 僧正が書いた国家的事業であるナガラクレタガマは 1365 年の Hayam Wuruk 王の治世までで終わっている。〈xv〉それ故、ナガラクレタガマはその後の時代に関する説明には使えないのである。サカ歴 1535 年、西暦 1613 年に書かれたパララトン¹は確かにシンゴサリの初期からマジャパヒトの末期までの時系列で構成されてはいるが、実際には Hayam Wuruk 王以降の歴史は極めてこんがらかっており、ただマジャパヒトの支配者たちの名前と埋葬された年が書かれているだけである。この期間は極めてこんがらかった形で 112 行にわたって解説されている。1896 年に「パララトン」を出版した Dr. J. Brandes は混乱した情報から抜け出すことができなかった。マジャパヒトに関する各種の年代記と比較しても「パララトン」の持つ情報は極めて精緻であるとはいえ、この時代についてはいまだ暗闇なのである。この年代記と「パララトン」の知見は実に頭を悩ますのである。歴史解釈において、物語と歴史的事実を区別しようとする。どれが歴史でどれが物語であるかを区別するのは常に困難である。この論文を締めくくるにあたって「史料の追加はより多くの説明を確実に与えるものである。この時代での史料の追加はありえないが故に我々は到達したもので満足しなくてはならない。〈xvi〉後日のさらなる研究で、より長大でより詳細な研究が、現在未解決となっている重要な問題について説明を与えられるようになるだろう。この本の著者よりそれを希望するものはおらず、いまだ闇の中にある諸問題に関して説明できるようになればよい」と Brandes は著書パララトンの 203 と 204 ページで述べている。

熟練した遺跡の専門家の Dr. W.F. Stutterheim も Dr. Brandes と同様な説を持っている。曰く、「Wikramawardhana は Rajapatni の墓所である Bajanlangu の墓廟に埋葬された。彼らの後任に関して、マジャパヒトの歴史の進行方向を理解するための史

料が互いに矛盾し混乱しており、混迷の度が極めて高いために我々は多数を知ることができない」と。

マジャパヒトの歴史に確かに注目した歴史家は多く、出版されたマジャパヒト史もまた多い。Dr. C.C. Berg 教授のような熟練した専門家でさえ、マジャパヒト史を数年間を要する特別研究案件としたのであった。Berg の論文は、マジャパヒト末期を解釈するための困難さから抜け出せてはいないが、極めて回りくどい有用な論をたくさん含んでいる。1939 年以來、Berg はマジャパヒト史の研究に注意を集中し始めた。彼は *Opmerkingen over de Chronologie van de Oudste Geschiedenis van Maja-Pahit en over Krtarajasawardhana's regeering* (1939 年の B.K.I. 98 巻収納) <度欲註:Krtarajasawardhana の治世におけるマジャパヒト古代史の編年へのコメント>という題の論文から着手した。この論文は 1950 年の *Kertanegara, de miskende empirebuilder* (Orienttatie 34 号)<度欲註:Kertanegara、帝国の無視された創立者>という題の論文に続くものであった。1951 年の論文 *De evolutie der Javaansche geschiedschrijving* (Mededelingen der Koninklijke Nederlandse Akademie van Wetenschappen、新編 14 号)<度欲註ジャワの歴史の進化(科学のロイヤル・ダッチ・アカデミーの注意事項、新編 14 号)>と題した論文はやや混乱させるものであった。De *Geschiedenis van Pril Majapahit* (Indonesië IV 481 ページと V 193 ページ)<度欲註:マジャパヒト前史>と、De *Sadengoorlog en de myth van Groot Majapahit* (Indonesië IV 385 ページ) <度欲註:大マジャパヒトの Sadeng 戦争と神話>はマジャパヒト王国について総括する論文の準備として意図されたものであった。残念ながら、上記の Berg の大作を読む機会に恵まれていない。インドネシアの側からもマジャパヒト史を詳細研究する希望があった。その希望は言うまでもなくマジャパヒトの繁栄、まずは Gajah Mada に熱をあげた Moh. Amin 教授の登場であった。Yamin はマジャパヒトの行政を調べたのだった。

Babad Tanah Jawi と Serat Kanda は現代ジャワ語でかかれた流布している歴史書であり、マジャパヒト王国の建国から衰亡までの運命を解説している。この歴史書は物語を編みこんだものである。どれが史実であるのかどれが物語であるのかを区別するのは容易ではない。Babad Tanah Jawi と Serat Kanda にあるマジャパヒト王の名前はパラトンとナガラクレタガマ中のもので異なっている。解説は詳細に至るまで広く行われている。小さな出来事も記載されている。とはいえ衰亡期のマジャパヒトの運

命に関しては Babad Tanah Jawi の中で大量の材料を得ることができる。史実を得るためにこれらの知見を厳しく渡し分ける必要がある。このような分離作業は簡単な仕事ではない。歴史というものを考える方法を求めるのなら、他にやりかたはないのである。分離作業は避けられない。渡し分け能力がどこまであるのかは作業者とそれに使う道具の能力に依存する。いずれにせよ Babad Tanah Jawi と Serat Kanda 中の知見には注意をひかれ、先験的というだけでそれを拒否できないのである。名前の相違はそれを拒否する絶対的な理由ではないのである。歴史の流れの中で人物の名前が変わることは多く、その飾りの多くは作者が追加したものである。ギリシアやローマの歴史のように多くの事実は直接的ではなく象徴という形式で述べられている。したがって、本来の意図を知るために当然のことこの知見を解釈する必要がある。いずれにせよ、マジャパヒト王国の衰退期におけるジャワの歴史作家たちが使った方法はその多くが大衆の間に生きていた宗教の影響を受けていたため、それはしばしば物語のように聞こえるのである。この方法は意味をなさない。遺産の見えざるものへの信仰と、夢判断として夢を信仰することなどは大衆の中で生きていた現実であった。上記の件は史実の記述に影響している。したがって、史実として信じられる Serat Kanda と Babad Tanah Jawi の内容がどこまでであるかを詳細に調べる努力をしなければならない。〈xviii〉 Serat Kanda と Babad Tanah Jawi は 18 世紀初頭にはやった著作である。その時代、インドネシア人はオランダ人に支配されていた。この植民地時代を生きる中で、すでに色あせてしまった自国の偉大さを人々は考えたのだった。Serat Kanda と Babad Tanah Jawi の著者は過ぎ去りし時代の歴史上の人物を尊敬することを渴望したのだった。尊敬を受けるに値する英雄として彼らが受け入れた歴史上の人物に対する奇跡と妖術がその一構成要素となった。Serat Kanda と Babad Tanah Jawi はマジャパヒト王国の偉大さと Demak イスラム王国、それから記憶だけに基づいた大衆の意識再構築の結果であり、実際には歴史分野における人々の考え方と相違なかった。すでに忘れ去られた話もたくさんあることは確かであり、半分だけ記憶に残り、薄ぼんやりしているものもある。この遠い昔で薄ぼんやりとしか残っていない歴史的事件に対する大衆の記憶は年代記作成の資料となった。多数の事件がその事実を隠ぺいされ、その他多数も追加されたのであった。ドキュメンタリーとしての精密な歴史の記録は存在しないことをわかっていただきたい。この問題は各種の物語を発生させる原因となっている。

Hayam Wuruk 王の治世以降に発出されたマジャパヒトの碑文で我々にまで至っているものは多くない。すでに出版されたものはサカ歴 1307 年の CXXI、サカ歴 1319 年の CXXII、サカ歴 1324 年の CXXIII、サカ歴 1327 年の CXXIV、サカ歴 1358 年の CXXV、サカ歴 1378 年の CXXVI、年号不詳の CL と CLI、サカ歴 1382 年の XC、サカ歴 1408 年の Majajejer と Dukuhan Duku、Jiyu, XCI, XCII, XCIII, XCIV, XCV 碑文である。いずれにせよこれらの碑文は治世を敷いた王の順番を知るために重要な意味を持っている。これらの碑文は、しばしばパララトンと Babad Tanah Jawi と Serat Kanda の中で不明瞭に述べられている歴史上の事実を探す手がかりとなりうる。〈xix〉1964 年に Mangaraja Onggang Parlindungan 編の Tuanku Rao という本が出版された。Parlindungan 氏は 1951(1915 の間違いか)年から 1941 年までの間に熱心に史料を収集した Sutan Martua Raja という名の亡父からの資料を整理した。マジャパヒトの衰亡期と関係で私の興味を引いたのは、「1411 年から 1564 年のジャワ島内のイスラムの発展における華人・イスラム・ハナフィの役割」と題された添付 31 であった。この添付物は Poortman の調査結果のまとめであった。地方行政管理長の Poortman は 1928 年に警察の協力のもと、スマランの三保洞の家宅捜索を行った。中国の書物はすべて Poortman が没収した。その量は牛車三台分にもなった。この書物は 400～500 年前のものであった。Parlindungan が収集したこの史料は Babad Tanah Jawi と Serat Kanda がどこまで歴史の著述として信じられるかを知るために大変有用であった。スマランの三保洞から得た中国語の書物と Serat Kanda の内容との比較検討の結果、実に驚くべき各種の史実を得たのであった。Poortman と Parlindungan はこの記事の中で、その意味が極めて大きい史料を提供したのであった。この作業によって功績をたてた彼らはマジャパヒト王国の衰亡期を解明したのであった。

我々が直面している作業とはこれらの知見の元データを比較することである。既存の資料にある、物語に編みこまれたいろいろな名前の歴史上の人物を特定することに努めることである。それは史実と幻想がごちゃごちゃになっているからである。幻想から史実を厳格に分離することが必要である。このスクリーニングの結果に基づき、歴史学的マジャパヒトの王の系譜を編集することにする。正確には王の名と治世の期間をはっきりさせる必要がある。今まではっきりしなかった王の名を見つかるまで探すことにする。この歴史性のチェックは碑文の研究と同様だからだ。〈xx〉

Babad Tanah Jawi と Serat Kanda に見られるマジャパヒト王国に関連する歴史上の人物は詳細な調査が必要である。この Babad Tanah Jawi と Serat Kanda の内容がどこまで歴史的に信用できるのかに注目する必要がある。換言すれば、我々が Babad Tanah Jawi と Serat Kanda の内容に関する歴史解釈をすることなのである。

崩壊を伴って最期を迎えたマジャパヒト王国の衰亡は単に政治の問題ではなく、国家の生命の問題でもない。いずれにせよ、国家の生命と社会的生命とは緊密な関係がある。とある国の存在と崩壊は社会的状況と国民の精神状態に多く依存する。社会的状況とは国内の経済発展に関係し、一方、経済発展は経済的と非経済的な各種の要素によって決まる。要するに、民族の経済的生命とは、生計を維持するための人々の努力に関連した各種の要素が融合した結果なのである。

社会的状況がいかに重要であっても、人間の生活でいかに大きな役割を担っていたとしても、社会的状況は単に人間の生活の一つの局面でしかなく、民族の生活の一面でしかない。これらの中で極めて重要であると理解できるものの一つは、精神状態である。マジャパヒト人たちの持つ道徳とやる気、考え方が組み合わせられてマジャパヒト人たちの歴史の進む方向を決めたのだった。その結果はしばしばより大きくまた社会状況と対抗するものであった。素晴らしい精神状態とは、過度に劣化していた社会状況を改善するために投入する第一の資本であった。逆に言えば、劣悪な社会状態はいうまでもなく虫に食われた精神を持つ民族の発展に対する阻害要素となったのである。

マジャパヒト王国の崩壊に直面した時代にマジャパヒトの人たちの精神的と社会的状況は、澁刺とし新国家建設の理念とまだ新しいイスラム地域を拡大しようとすることに燃えていた Demak の人たちの精神状態と実際に対比される。<xxi>風化した精神は新しい精神と相対していた。マジャパヒトの衰亡期と Islam Demak の勃興期に編みこまれたすべての要素は歴史の進行を理解するための光であることを十分に納得する必要がある。上の文章は単に政治史の解釈ではなく、14 世紀末から 16 世紀初頭のまでの期間におけるジャワ民族が生きた歴史の解釈であり、ジャワ・ヒンドゥーのマジャパヒト王国の崩壊と Islam Demak 国の形成に関係している。

史実というものは時に飲み込むには苦すぎ、味わうには辛すぎるものである。歴史

とは過去に起きたことのあるいろいろな要素を含んでいる「ベンガルの鏡」である。歴史の鏡につけられた爪痕は消しようがないのである。それを好ましく思わない人はたぶんそれを隠蔽したり忘れ去ろうとするだろうが、それを拭い去ることはできないのである。人は色々な種類の解釈をすることができるが、解釈のもとになった史実は変化しないのである。歴史とは過ぎ去った時代の顔色なのである。どの角度からでも歴史を解釈する人は「顔色」が見えるものであり、それはその人の性格、主義主張、解釈の能力に依存する。解釈の結果は解釈を行った人の個性に従うのである。しかし、一旦史実が発見されると、その史実は変化することがない。この史実が味わうには辛すぎるとしても、歴史学はいつもそれを追い求めているのである。

い史実そして耳に心地よい史実、その両方とも自然に見なければならぬ。心地よいものは我々の心を満たす必要がなく、辛いものは心を締めさせる必要がない。我々の時代も将来において歴史時代となる故に、我々の時代の役に立つように過去の出来事からその利点を引き出すことに長じる必要がある。我々のこの時代に起きたことは将来の史実になるからである。〈xxii〉

想像の中で史実は生き返る。史実を想像することは将来における国家建設において民族の行動に命を与える知恵を与えることができるのである。それ故、歴史の覚醒は我々の将来の重要事項であるからしてそれを育てて発展させることが必要である。建国から崩壊までのマジャパヒト王国の諸事項は過去におけるインドネシアの国家的史実として直視しなおす必要がある。これに該当するマジャパヒトの歴史の諸事項は我々の注目を引くのである。

1953年にその数年前から著述を続けてきたナガラクレタガマの解説書が出版された。1965年になって初めてマジャパヒト王国の黄金期に関する歴史本の Menuju Puncak Kemegahan の出版が続いた。この著作は、刑法と民法に関する記事を除いて、Hayam Wuruk 王の治世における社会生活を描いたものである。著作 Runtuhnya Kerajaan Hindu-Jawa dan Timbulnya Negara-negara Islam di Nusantara の出版に伴い、私が数年にわたって研究してきたマジャパヒトの調査プロジェクトは終わった。マジャパヒトの歴史研究の成果を、歴史学の分野における貢献として心を込めて読者に進呈するものである。この最後の成果の概要は1967年にアメリカの Ann Arbor で行われた International Congress of Orientalists での The Decline and Fall of the

Kingdom of Majapahit という題の論文として知られている。この成果を書いた論文は国際的に有能な歴史学者たちから大変暖かい賞賛を受けたのであった。インドネシア人自身は当然のこととしてこのことを知っていなければならないのである。

訳出終了 2015/7/10